SURE 静岡大学学術リポジトリ
Shizuoka University REpository

静岡大学ガムラン演奏団の活動：地域とつながる異文化

メタデータ	言語: ja 出版者: 静岡大学教育学部 公開日: 2013-04-15 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 小西, 潤子 メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/10297/7183

静岡大学ガムラン演奏団の活動
—地域とつながる異文化—

音楽教育講座　小西　潤子

はじめに

平成 19 年度に大阪音楽大学より静岡大学キャンパスミュージアムに寄贈されたバリ・ガムランは、その後着実に地域へと場を広げて活用されている。まずは平成 20 年 11 月、キャンパスミュージアム特別展で展示および静岡大学ガムラン演奏団・ナーダ・ブラーマ・チャルヤ（サンスクリット語による「学徒による」という意味）の結成と演奏、ワークショップを行ったことをきっかけに、今年度焼津市より国民文化祭への参加要請を受けた。それに先立ち、静岡大学創立 60 周年記念事業の一環として実施された「静大フェスタ」に参加し、展示と演奏を行った。さらに、7 月 2 日に実施した「フーゴ・ティッチアーティ　ヴァイオリン・リサイタル」（本報告書の別のレポート参照）に訪れた大学女性協会静岡支部長・鈴木キミエ氏より、来年度同協会の大会におけるアトラクションとして演奏の依頼を受けている。

ナーダ・ブラーマ・チャルヤの特徴としては、静岡キャンパスの学生を中心としつつも全学部の 1 年生から大学院生まで幅広く参加している点があげられる。その中には、インドネシア人留学生や東海大学海洋学部の学生も含まれている。とりわけ、岐阜大学連合農学研究科に所属し、静岡大学農学研究科に配属されているイケトゥット・ムジャ氏の存在は大きい（写真 4 参照）。ムジャ氏は故郷バリで幼い頃からガムランを演奏していたそうで、来日後も静岡近辺在住のインドネシア人を集めてケチャをするなど、バリ文化の普及に熱心な活動をおこなっている。ムジャ氏がナーダ・ブラーマ・チャルヤの結成当初から指導者として関わっていることで、本演奏団はバリ直伝の演目を保有するとともに、衣装や展示品の提供を受けている。

1．静大フェスタ

大学が地域に出て活動を紹介する主旨で平成 20 年度より始まった静大フェスタは、昨年度の青葉通りのオープンスペースから本年度はツインメッセ北館へと移り、2009 年 5 月 30 日（土）～31 日（日）で実施された。雨天の影響を受けないことがガムランにとってよい条件であったが、準備の段階でもっとも問題となったのが楽器の運搬についてであった。前日からの搬出計画を立て、キャンパスミュージアムとの協力により専門の業者に輸送を依頼した。とはいえ、大学と現地それぞれにスタッフが待機し、楽器の梱包からセッティングまでに対応する必要があった。

演奏の本番は、5 月 30 日午後 15:00 から 40 分程度であった。今回は、ムジャ氏（岐阜大学の指導を受けて、演目としてバリ島の芸能ケチャを加えた（写真 1）。

写真 1　ケチャの上演

また、演奏に続けてステージ上で行ったワークショップにはたくさんの来場者が参加し、ガムランの響きを楽しんだ。演奏している側の学生もまだ初心者であるが、それぞれ丁寧に対応していた（写真２、写真３）。

写真２　静大フェスタのワークショップ

静大フェスタ終了後、ガムランは今年度実施される特別展「静岡大学のあゆみ」とともに、大学会館で一時展示された。広いスペースに設置されたことから、7月2日のフーゴ・ティッチアーティ・ヴァイオリンリサイタルの来場者にも学生が案内をした。

写真３　ガムランと出会ったヴァイオリン・リサイタルの来場者

２．はばたく静岡国民文化祭

国民文化祭は、1977年から毎年、各都道府県持ち回りで開催されている文化の祭典である。今回は静岡県で開催地となり、県内36市町村で演劇、吹奏楽、美術展など108のイベントが行われた。ガムラン演奏団が参加したのは、そのうち焼津市主催事業の海の文化フェスティバルの一環「海のおもしろ民族学展」である。これは、焼津市文化センターの小ホールで2009年10月31日から11月8日まで行われた特別展示である。その内容は、海に関する民族学関係資料の展示であった。ガムランは展示物としても魅力的であることから、焼津市の依頼を受

けてガムランの展示と演奏に協力することになったのである（写真５、写真６）。

写真４　演奏　向かって手前右の太鼓奏者がイケトゥット・ムジャ氏

演奏とワークショップは、2009 年 11 月 1 日に２度実施した。演奏会には各 50 名ほどの観客が集まり、ワークショップも大人から子どもまで積極的に参加してくれた。（写真７、写真８）。

写真５　国文祭ワークショップ

また、本公演に際しては、浜松市在住の作曲家・小菅由加里氏（写真 10）からも全面的な協力を得た。静岡大学大学院教育学研究科で学んだ小菅氏は、これまでも音楽教育講座スタッフが関係するイベント等に楽曲提供等、協力いただいていた。今回の国民文化祭の演奏会に向けては、委嘱作品《海辺にて》を創作していただいた。小菅氏は、そのためにバリ島に赴いてガムラン曲の指導をうけ、現地でのインスピレーションを得てオリジナル曲の創作に至った。

写真６　作品解説をする小菅由加里氏

３．地域とつながる異文化

なぜバリなのか、なぜガムランなのかと、異文化接触には必然性を求めたいところである。しかし、現在のように交通手段が整っていなかった大航海時代を思い浮かべれば、多くの異文化接触が偶然の賜物であったはずである。静岡大学にガムランが寄贈されたことも、ムジャ氏が学内に配属されていたことも、そのムジャ氏の指導教員・小嶋睦雄教授と筆者が接点をもったことも、焼津市との仲介役となった東海大学海洋学部・川崎一平教授と小笠原丸の船内で出会ったことも、小菅由加里氏に作品の委嘱ができたことも…思えばすべてが偶然の積み重ねによるものである。今年度の事業を通じて、ガムランと演奏団員との出会いはさらに地域の人々との出会いへと発展した。国民文化祭で演奏の場が与えられたことにより、学生はガムランの演奏技術習得をし、地域の人々にその成果を還元し、共に学ぶことができた。双方にとって異文化であるガムランが大学と地域とのつながりの接点となるなど、当初の想定以上の成果があがった。また、学生からは焼津市に興味をもったという声も多く聞かれた。日常的に接する機会の少ない自治体担当者と直接やりとりをする中で、焼津市の取り組みの素晴らしさがわかったというのである。地域の人々と接することはもちろん、地域そのものを知る機会をガムランは与えてくれた。

来年度は大学婦人協会全国大会（5月8日）のほか、附属特別支援学校の中等部生徒による大学訪問に際するガムランの紹介（4月20日）へのリクエストもいただいている。「○○がないと出来ない」というのは簡単だが、「○○をどのように使えばよいか」という発想によって、地域とつながる異文化としてのガムランの一層の活用をしていきたい。